

## 私の戦争体験談 あの時

中西百合

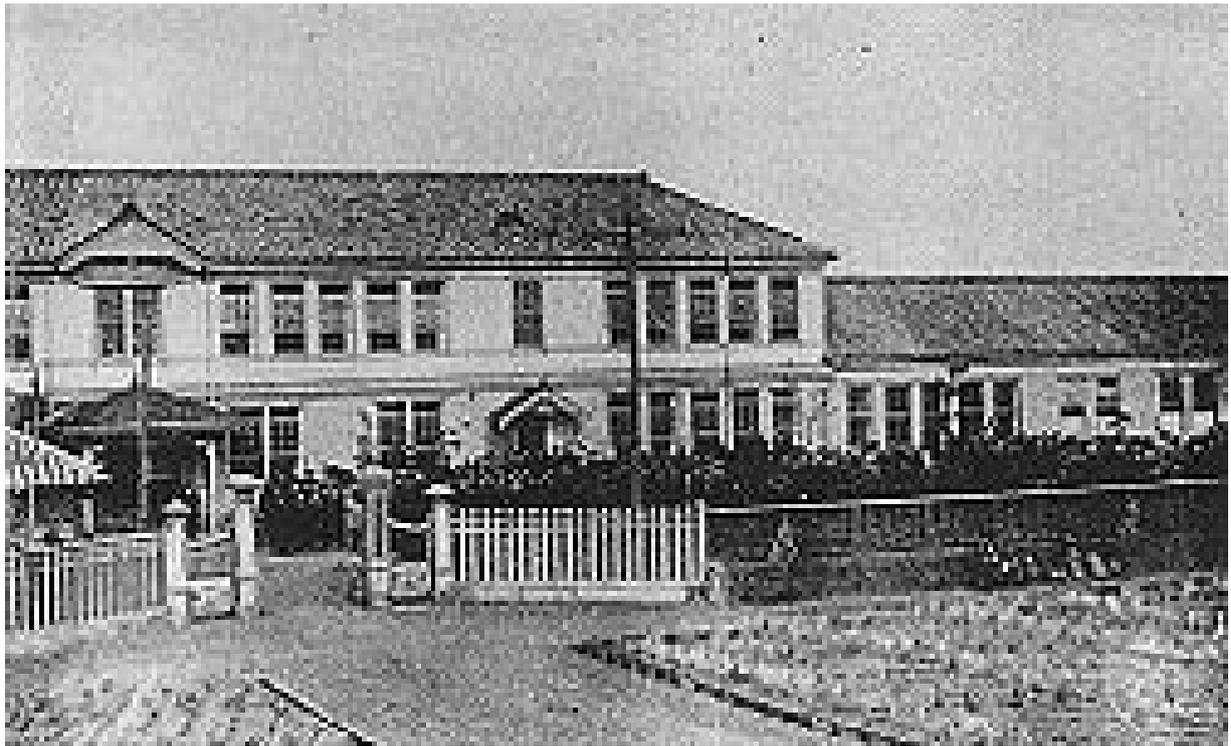
昭和 20 年 6 月 10 日の朝 8 時近く、小きざみにひびくウウッ、というサイレンの音。また空襲警報が発令されたのです。校舎の長い廊下を全力で走りぬけ、附属小のわきの壕へ飛びこみました。と同時に地鳴りのような轟音。思わずふり帰った時、超低空で迫ってくる巨大な B29 の姿が目に入りました。ハッとして伏せたのと同時にドドーン、バリバリという地響きがして、真っ暗になったのが同時でした。

気がついた時、自分が生きているのか死んでいるのか全然わかりませんでした。あたりは物音ひとつしません。この壕に友達がいるはずなのに、その心配さえ感じられないのです。だいたいたってから、思い切って声を出してみました。「みんな生きてる？」すると「生きてるよ。」と誰かの声が帰ってきました。やっと助かったのだと思いました。「助かったんだね。」「よかった。」「出てみようよ。」口々に言いながらつぶれた壕からはい出しました。私達の目に映ったのは、もうもうと立つ土煙の中に、バラバラに裂けて木屑となった木造校舎の長い山でした。その中ほどにくずれかけた附属小の玄関が、タイルの壁をぶら下げてやっと残り、見えるはずのない京成電車の線路の土手が、すぐそこに見えていました。

運動場に出た時、私達はあっと驚いてしまいました。大きな鉢穴が、ポカポカと口をあけています。まるで月面のクレーターそっくりです。先生に言われて、図書館の大事な書物などをかかえて、すり鉢穴を右へ左へと除けながら、壊れなかった附属小の体育館に何度も運びました。

そのうち、亡くなった友達と行方不明の友達が二人もいることがわかりました。手分けして捜したのですが見つかりません。「確かここに防空壕があったんじゃない？」と誰かが言いました。見つからない友達の一人は、そこに一番近い部屋にいたはずでした。もしかしたらとわずかな望みをかけて、救援の兵隊さんがほったら、友達がうつぶせで見つかったのです。だき起こすと、色白の頬にはまだ赤みが残っています。大急ぎで人工呼吸を始めました。「糸子さん。」「糸ちゃん。」と、ひっきりなしに呼びかけながら、一時間以上は続けたように思います。でも頬に紅をさしたまま、とうとう生き返ってはくれませんでした。もう一人の「富士子」さんは、崩れたタイルの下に三日間も埋まっていたのです。「私はここよ」と送り続けられたサインは、壁やタイルの間から覗いていた、ほんの少しのもんぺの布地だったのです。

私達は、「あの時」自分がどんな行動をとったのか、覚えていないことが多くありました。何年も後になって作った文集で、誰がどんな体験をしたのかを、やっと知ることができたのです。（「私は忘れない」から転載）



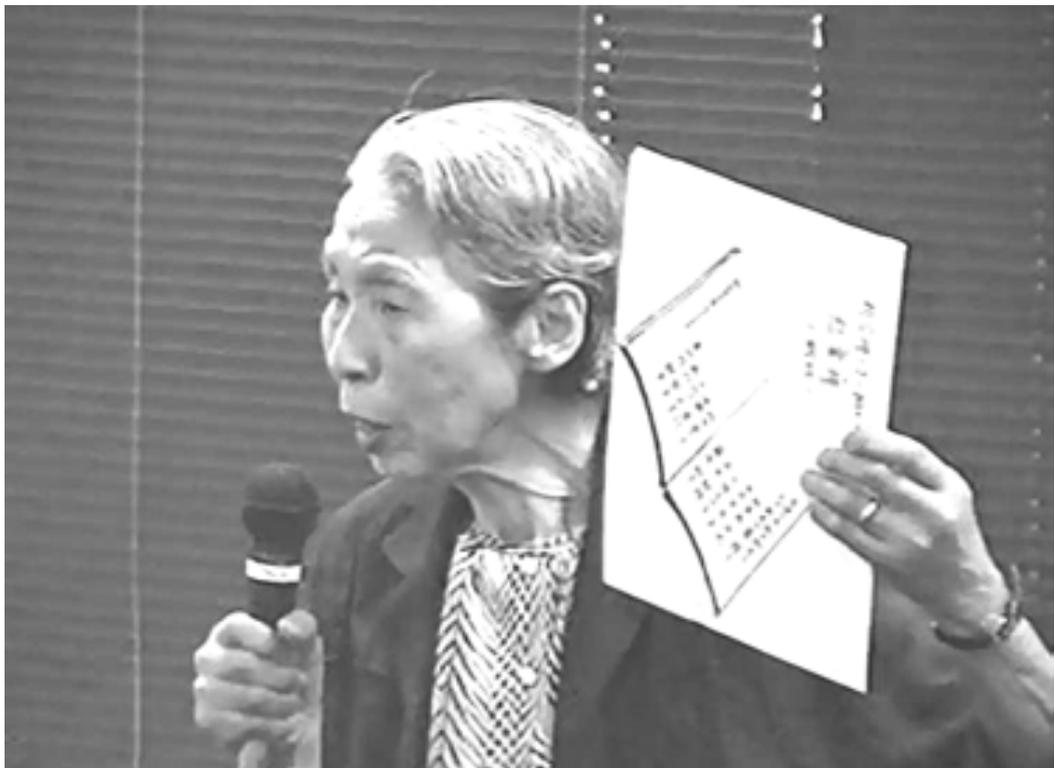
1945年6月10日 B29 の爆弾により破壊される。(ウキペディア千葉師範学校より)



当時の女子学生 (2012年ピースフェアで中西百合が展示した写真を使用)



千葉県女子師範学校 同附属小学校・幼稚園跡の碑



編集者注 中西百合さんは、この年の秋に逝去されました。